

# 新島 襄の神学思想

大 越 哲 仁

## はじめに

神学者の大塚節治は、「新島先生は何等の神学も残されなかった」し、「新島先生の生活から神学体系を誘導し得るとは思はない」と述べた<sup>1)</sup>。

確かに新島は神学研究を専門とする神学者ではなく、神学に関する著作も残していない。しかし、新島はアメリカ会衆派教会の牧師の資格をもつアメリカン・ボードの宣教師であり、日本においても、彼が中心になって設立した公会（会衆派教会）、それら公会の伝道協力会社である日本基督教伝道会社（1878年設立）、その発展形である日本組合基督教会（1886年設立）等の牧師であったわけで、伝道の中で神とは何か、キリストとは何かを語っており、当然ながらそれに関する思想＝神学思想は保持していた。

もちろん、新島の神学思想は、彼自身の独特なものというよりは、プロテスタント、特にニューイングランドのピューリタリズムの流れを受け継いだものであるから<sup>2)</sup>、キリスト教を深く知る論者にとっては、それはあたりまえすぎて論じることにあまり価値を見出さないであろう。神学者の魚木忠一も、自身が著した新島の評伝中、彼の宗教を論じる章で「（新島の）神学は正統主義として、顕著な点を持たなかった」と簡単に記す程である<sup>3)</sup>。

新島の全体を理解するには彼のキリスト者としての面を理解することが不可欠だが、日本では、キリスト教信者が人口のわずか0.8%程度であってキリスト教を知らない者が大多数であり、キリスト教における神とは何かというような、クリスチャンからすれば当たり前のようなことも一般にはあまり理解されていない状況である。その中で、新島の神学を「正統主義」という神学用語だけで語っても、それが何を意味するのか、キリスト教に対する知識が乏しい者にとって理解は困難である。その意味でも新島の「正

統主義」のキリスト教神学を具体的に明らかにする必要があるであろう。

さらに、上に紹介した大塚や魚木のコメントは、新島の全集2・「宗教編」が上梓される以前のコメントであって、現在、「宗教編」を注意深く読むと、新島の神学思想が豊かに現れていることに気付く。

そこで本稿では、新島の全集「宗教編」を参考にしながら、新島の神学思想をあらためて整理し、明らかにすることを目的とする。そうすることによって、クリスチャンではない大多数の方の、キリスト者・新島襄の実像を知ることの一助となることが本稿の狙いである。

## 「天父」としての神との出会い

新島自身が自らの神との出会いを綴った文章は2つある。

その一つは、彼が脱国してアメリカに到着した2ヵ月あまり後の1865年10月、乗船してきた貨物船ワイルド・ローバーの船主であるハーディーから指示されて書き上げた所謂「脱国の理由書」(原英文)であり、もう一つは、同文書執筆の20年後の1885年、彼の2度目の渡米の折にハーディーの別荘に滞在して脱国までの自分の半生をまとめて同夫妻に献上した所謂「私の青春時代(My Younger Days)」(同)である。

前者で彼は、神との出会いを次のように述べる。

ある日友人を訪ねると、彼の書齋で聖書を抜粋した小冊子を見つけた。(略) 私はそれを彼から借り、夜に読んでみた。(略) 私はまず神のことが理解できた。すなわち神は天と地を分けたくえ、光を始めとして草木や鳥獣、魚などを地上に創造された。神はご自身の姿に似た形に男を創り、そして彼の脇腹の骨を切り取って女を創られた。神は宇宙のすべてを創造した後で休まれた。その日を私たちは日曜日または安息日と呼ばねばならない<sup>4)</sup>。

これを読んだ新島は、「誰が私を創ったのか。両親か。いや、神だ」、だから自分は「神に感謝し、神を信じ、神に対して正直にならなくてはならない」と独言ち<sup>5)</sup>、さらに、「私は両親から生まれ育てられたが、本当は

私は天の父のものである。それゆえ私は天の父を信じ、その父に感謝し、そしてその父の道を進まなくてはならない」<sup>6)</sup>との考えを持った。

一方、「私の青春時代」では、次のように神との出会いを述べている。

私はそれらの書物〔上海か香港で発行されたキリスト教に関する二、三の書物〕を夢中になって読んだ。疑う気持ちが生じた反面、畏敬の念に打たれもした。以前に勉強したオランダ語の本を通して、「創造主」という名称は知っていたが、漢文で簡潔に書かれた、聖書にもとづく歴史書で神による宇宙の創造という短い物語を読んだ時ほど創造主が身近なものとして私の心に迫ってきたことはなかった。私は、私たちが住んでいるこの世界が神のみえざるみ手により創造されたのであって、単なる偶然によるものでないことを知った。そして同じ歴史書において、神が「天父」とも呼ばれているのを知り、神に対していっそう畏敬の念を持つようになった。なぜなら、私にとって神は単なる世界の創造主以上の存在として感じられたからである。(略) 神を私の「天父」と認めたからには、私はもはや自分の両親と分かち難く結ばれているとは感じなかった<sup>7)</sup>。

この2つの文章を読むと、新島は、神との最初の出会いのときから、神を世界の創造主という自分の外にある客体としての存在だけでなく、自分自身を創造してくれた「天父」という自分にとって特別な存在として捉えていたことが分かる。エミール・ブルンナー流に言えば、新島は神と出会ったときから、自分と神との関係を「われ-それ」との関係ではなく「われ-汝」という関係として把握したのである<sup>8)</sup>。それは、1867年の弟双六宛の書簡にも、新旧約聖書を「上帝(造物宰主)の造りを受けたる我々ども、是非とも読まねばならぬ」<sup>9)</sup>、我々は神によって創られたのだから、必ず神を知らなければならない、と述べたことから明らかだ。

### 「天上独一真神」と「手に製したる偶像」

新島が神をどのように理解していたか、彼が洗礼を受けた3ヵ月後、父

民治宛に書いた手紙では、神を「天上独一真神」と呼んで、日本の神仏は木、鉄、銅、石、紙等により「手に製したる偶像」であり、「天照宮も八幡宮も春日大明神もやはり我々と同じく独一真神より造を受けたる人間」と断言する。しかし「天上独一真神は天にも地にもただ独り」の神であり、「天地、星辰、人間、鳥獸、魚類等をつくり、永々ご存在、ここにもかしこにも在らせられ」<sup>10)</sup>と論じる。日本の神仏は、もともとは神が創造した人間か、その人間が作った偶像である。真の神は宇宙にただお一人であって、神は万物を創造された永久不変の方であり、天上に在って我々を超越していると同時にこの世に内在しておられる。

もともと新島家は日本の神仏に対して厚い信心を持ち、彼も仏教の信仰や儒教の倫理の中で育てられていた<sup>11)</sup>。その新島が、キリスト教に出会い、その神こそ唯一の真の神として受け入れて日本の神仏を「手に製したる偶像」として退けたのだが、このとき以降、新島は、キリスト教と他の宗教との違いとは何か、そして、なぜ人は宗教を求めるのか、に関して問題意識を持ったようだ。

その問題について彼は思索を深め、後に次のように整理をしている。

### 「宗教は万民の望む所也」

全世界の人民において、それが開化と未開、開明と野蛮を論ぜず、「宗教心ナルモノハ実ニ天下万国ノ輿論」であって、屈指の学者や英傑の論説から生まれたものとみなすことはできない。この宗教心を分析して簡略的に定義すれば、すなわち、それは人間がその由来する場所に遡り、その源に帰ろうと図る心なのである。(略) 宗教心は万国の一致するものである。だから、これを万国の世論というべきである。これはあたかも（地球上では何処でも）磁石が北を指すのに似ている。しかし、人智が足りないために、人智の誤謬より、磁石の針が真北を指さないけれども、(真理に対して)「是レ当ラスト雖遠カラサル」のである。中国の孔子が「天」といい、仏教が「極楽」といい、ソクラテスが「万物ノ主宰」といいまた「知恵」といい、『易経』では「神」・

造化の働きといったが、この理由から考えると、孔子、釈迦、ソクラテス等も、全世界の世論から卓越して新説を唱えたのではなく、やはり世論の中であって世論の幾分を占めるものなのである。全世界の人間がこれを求め、また数万の卓越した孔子、釈迦、ソクラテス等もこれを求めて十分にこれを得られず、また十分世人を満足させるに至らないのは、彼らが愚であって不満足な思考を行ったのではなくて、一般の人民から卓越した知識を以ってすらも、それだけでは不足であって、真理を発見するに至らなかったのであろう<sup>12)</sup>。

宗教心とは、人間がその由来する場所に遡り、その源に帰ろうと図る心であり、その宗教心によって宗教を求めることは世界万民共通である。孔子も釈迦もソクラテスもそれぞれ天や神、真理について異なることを語ったが、彼らの説は彼らが卓越して独自の説を唱えたのではなく、万国の世論というべき宗教心の一部を彼らなりに語ったにすぎない。磁石の針が北の方角を指すように彼らは概ね同じ方向を示しているけれども、なお十分に真理を説明できていないことは、人智は限りがあって、彼らの卓越した知識によっても、真理を発見するにはなお不足しているからであろう、このように新島は世界万民に共通する宗教心を説明する。

### 「人為ノ宗教」と「天啓ノ宗教」

宗教が世界万人の望むところであるために、世界には、様々な宗教が生じたと考える新島は、その宗教は、「真理ナルモノ」と「真理ニ類スルモノ」の2種類あるとして、その違いを次のように述べた。

宗教上には「真理ナルモノ」があり、また「真理ニ類スルモノ」がある。

宗教には数種類ある。儒教、仏教、神道があり、イスラム教があり、バラモン教がある。偶像を拝する宗教があり、偶像を拝しない宗教がある。これらの宗教を大別すると2種類ある。シーリー氏がいうところの「人為ノ宗教」と「天啓ノ宗教」である。

人為の宗教もこれを軽蔑してはならない。しかし、その多くは一国

に限るか、または時代を限って消滅するものである。

天啓の宗教は万国の人民に関する教えであるから、万国に交際が行われないうちに速やかには伝播できないけれども、これがもし真理であって人間に幸いを与えるものであるならば、必ず万国に伝播するものである。現在、万国の交際も盛んになり、物品の交易だけでなく、志操の交易も始まったので、宗教も外国より輸入されて到来するようになった。今日、アジアもヨーロッパも往来が行われ、互いに好ましいもの、都合のよいものが採用されるようになった。

そもそもキリスト教はユダヤから始まった。(その教義は) 兄弟互いに相愛する理、罪人を救う理を持ち、道・真・命を人間に示す神の意思すなわち天意によるものである。(人類はキリスト教によって) 人間の内にある悪を憎むこと、清潔な生涯を送ること、己を克服し得ること、人間社会を改良することができる。(略) それは罪悪を討伐する、(キリスト教の) 真理は勝利をもたらすのである<sup>13)</sup>

ここで新島が触れた J. H. シーリーの「人為ノ宗教」と「天啓ノ宗教」とは、シーリーが『宗教要論』で次のように論じたことを意味する。

宗教には二種あり、唯二種あるのみと私は申しました、甲は人を以て始まり人の努力に依て神を求めます、乙は神を以て始まり、或る全く神聖なる方法に依りて人を求めます、茲に基督教の凡ての他宗教と違ふ特色があります、そしてこの教義の啓示に聖書の凡ての他の書との相違があります<sup>14)</sup>

シーリーは、宗教は2種類のみであって、その一つは、人が始めたもので人の努力によって神を求めるものであり、もう一つは、その源が真の神に基づくもので、まったく神聖な方法によって人を求め人を救おうとするものである。キリスト教はこの一点において他の宗教と異なるのであって、この教義すなわち神より人を求める啓示において聖書が他の書との相違がある、と主張した。

新島はこのシーリーの考えを次のように端的に説明する。

シーレ氏曰、基督教に於ては神より下って人間を求む、他の宗教に於ては人間より遡りて神を求む<sup>15)</sup>

新島は、このシーリーの「宗教二元論」とも言うべき理論を念頭に、「真理ニ類スル」「人為ノ宗教」の多くは一国に限るか、時代を限って消滅する一方、神の啓示による「天啓ノ宗教」は、世界の全人類に関する教えであるから、それが「真理ナルモノ」であれば、各国の交通が頻繁になるにしたがって世界に広がってゆく、と述べ、ユダヤの地で生まれたキリスト教は人間に道と真と命を示す真理<sup>16)</sup>であるから、そのとおり世界に広がったのだ、と論じるのである。

新島の議論で注意を要することは、彼が「人為ノ宗教」に対して、これを真っ向から否定しているわけではないことである。「人為ノ宗教」もまた「真理ニ類スル」ものであり、当然といえども遠からざるものなのであって、軽蔑してはならない。ただ、このような宗教は、完全な真理ではないために、一国や一時代に限定されるものである、とするのである。

それでは、なぜ人は「天啓ノ宗教」から離れて「人為ノ宗教」をつくるのであろうか、新島はそれを人間が「自己ノ情欲」によって偶像をつくるようになったからだ、として次のように説明する。

もともと人類はただ一つの神から創造され、その一つの神を知っていたのに、次第に「自己ノ情慾」に身を委ね、罪惡に沈溺し知識が退歩していった。さらにまた、神に仕える念が薄まり、偶像を拝伏しついに真神を忘れるに至った。これが偶像の起こり出たゆえんである。だから、偶像には万国に共通するものは甚少ない。エジプトにはエジプトの偶像、ギリシャにはギリシャ、ローマにはローマ、インドにはインド、中国には中国、日本には日本の偶像に限られる。そしてついに一地方に宗教が起こるのである<sup>17)</sup>。

新島は偶像を批判するが、その一方で、ソクラテスや孔子、釈迦など「人為ノ宗教」をつくった人々は皆等しく大変な天才であって、彼らの教えは、住民たちの習慣や思想、文化に適合していた、彼らは真理の一部を明らかにし、また同時代人に対して人類の義務を提示した、と語る。

They were equally great geniuses and their teachings were peculiarly adapted to the habits, thoughts, and cultures of their several countrymen. They revealed a partial truth, and held up the duty of mankind before their contemporaries<sup>18)</sup>.

しかし、彼らの教えが現実の世界で成果を生まなかった理由は唯一つ、彼らの教えが単なる人間の知恵であって、その哲学は人が発明したからである。そして、イエスこそが彼らが成し得なかったことを成し遂げるためにこの世に現れた、そう新島は断言するのである。

You may quite likely ask me why the teachings of Socrates, Confucius, and Shakamuni [Sakyamuni] are so fruitless? My only reply is that their teaching is a mere human wisdom and their philosophy is men's invention.<sup>19)</sup>

He [Jesus] came to this world to accomplish what Moses, the prophets, and all pagan reformers have failed to accomplish.<sup>20)</sup>

それでは、イエスの語ったキリスト教は、他の宗教と何が異なるのであろうか。

我々はすでに新島が指摘したシーリーの言葉によってそれに気付いている。「基督教ニ於テハ神ヨリ下ツテ人間ヲ求ム」、すなわち、キリスト教は神から始まり、神から人間に近づいた宗教なのである。

このことを新島は人間を救い上げる綱に喩え、次のように、キリスト教こそ「天啓教」すなわち「天啓ノ宗教」によるキリスト教であって、イエ

スの十字架は、神が人間を救済するために投じた綱である、と語った。

下から上に綱を投じるのは難しい。地より天に達するのは難しく、この世から限らない所に通じる橋を架けるのは出来難いことだが、限りなく生存し限らない力を持ち賜う神から、人間を救うためにその綱を下ろし、その道を築き、その橋を架け賜うことは決してできないことではない。これこそ、「天啓教」(「天啓ノ宗教」)が人間に示されなければ、人間が自らを救い得る手段が無い理由である。そして、このような「天啓教」において人間を救う手段とは何であろうか。それこそ、救い主イエスの十字架あるのみである<sup>21)</sup>。

本来、人間は唯一の神を知っていた。しかし、「自己の情欲」が深まるとともに真神を忘れて行った。しかし、宗教心は「天下万国ノ世論」であって、やがて「人為ノ宗教」が生まれてきた。特に、ソクラテス、孔子、釈迦などの天才は、人間の宗教心の一部を彼らなりに表し、それぞれ「真理ニ類スル」宗教を開いた。しかし、彼らが本当の真理に至らなかったのは、すべて人間が発明した人間の知恵による宗教であるからだ。これに対して、それまでの誰も成しえなかったことを成し遂げるためにイエスが世に現れた。彼が開いたキリスト教こそが、「神ヨリ下ツテ人間ヲ求ム」神の啓示による「天啓ノ宗教」であって、神から人間に近づき、道・真・命の真理を人間に表す「真理ナルモノ」なのである。新島はこのように世界の宗教の中でのキリスト教の特異性、真理性を明らかにしている。

ただし、ここで問題になるのは、キリスト教と合わせて「セム的一神教」<sup>22)</sup>と捉えられているユダヤ教とイスラム教に対する新島の理解である。彼は、この二つの宗教、そしてこの二つの宗教における神をどのように理解していたのだろうか。

残された記録を調べた限り、残念ながら、新島がユダヤ教とイスラム教に対して論じているものはほとんど無く、彼のこの二つの宗教に対する考えを伺い知ることはできない。ただし、ユダヤ教については、「ソモ、基督教ハ猶太亜ヨリ初マル」<sup>23)</sup>と述べたとおり、新島はキリスト教とユダ

ヤ教との連続性を語っており、また、ユダヤ教における聖書、すなわち、キリスト教における旧約聖書は、一般にキリスト者にとって「キリストの到来を待望しているもの」<sup>24)</sup>と理解されていて、彼の説教にも、創世記に言及したものやモーセ、ヤコブの一生をテーマにしたもの<sup>25)</sup>があることより、「正統主義」のキリスト者として、新島は、ユダヤ教の神とキリスト教の神を同一の神として捉えていたことは知られる。

一方、イスラム教については、『新島全集』を調査しても新島はほとんど言及していない。しかし、日本や米国東部という彼が生活した圏内においてイスラム教が身近に存在したとは考えにくく、彼がそれに言及していないのはやむをえないであろう。イスラム教も含めた「セム的一神教」の問題は、世界のすぐれて今日的なものなのである<sup>26)</sup>。

さて、ホーダーンは、現代神学の代表的人物の一人であるカール・バルトの神学を論じた際に、シュライエルマッハーやリッチェルなど彼以前の1世紀以上、正統主義に挑戦してきた自由主義神学は、人間から神への試みという誤った方向に進んでしまった、という確信の上にバルトの神学が成立していることを指摘している。シュライエルマッハーは、自己を見つめるとき神を見出せると説き、リッチェルは、倫理の世界に目を向けるとき神を見出すという、他の神学者は、人間の神秘体験に、または、理性の中に神を見出すと説いた。しかし、バルトはいう。人間から神への道はすべて行き詰まりであり、人間が神を求めるのではなく、神が人間を求めている、と。世界は絶えず変化し、それにつれてバルトの神学も変化したが、「神の人間探求」という中心的なテーマこそは、バルトが生涯抱き続けた中心的テーマであった、とホーダーンは指摘するのである<sup>27)</sup>。

新島が主張した、神から人間に近づくキリスト教の唯一性と、人間から神に近づこうと試み、それが故に真理に至らず失敗におわった他の宗教との根源的な相違は、新島の時代から勃興し、熊本バンドの多くの者がそれに飛びついて行った自由主義神学を乗り越えて、現代神学において改めて評価されるべきものと思う。

## 〔神第一ニ愛シタモフ〕

それでは、「神ヨリ下ツテ人間ヲ求ム」キリスト教の本質とは何か。新島はそれを愛である、と繰り返し語る。

「キリスト教とは何か」と人から尋ねられたら、「愛をもってこれを貫く」と答えたい<sup>28)</sup>。

心して見よ 神は善者不善者に雨を降らし日を照らす  
神の愛は完全<sup>29)</sup>

神の愛は、キリストを通して人間がはじめて理解できるようになった。神の愛が完全なのは、神を愛する者だけでなく、不義なる者でさえも分け隔てなく愛を注ぐからである。新島は特に、神の愛の完全さを「心シテ見ヨ」、よく注意して理解しなさい、と訴える。

律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」(マタイによる福音書 22. 35～40)

この聖書に基づいて説教した際、新島は、「愛は律法を満たすものであり、律法の基、中心である」<sup>30)</sup>と述べたあと、「神ヲ愛スルノ愛、如何トナレバ神第一ニ愛シタモフニヨル」<sup>31)</sup>と断言している。

我々が神を愛する愛を抱く理由は、神がまず第一に我々を愛し賜うためである。神がまず我々を愛してくださるからこそ、我々はその応答として神を愛することができるのである。

ここでも、神が、神から人間に近づいて来られることを新島は主張する

のである。

### 「神ノ愛 キリストニヨリ顕ハル」

それでは、その完全な神の愛を我々はどのようにして知ることができるのか。

新島は、神はそれをキリストを通して世に顕わされた、神の完全な愛は、神が我々を救うために自らの愛する子を十字架に死なせたことによって知ることができる、と述べる。

神ノ愛 キリストにより顕わる<sup>32)</sup>

神ノ愛 己れの愛子をして我等を救う為に十字架に死せしむ<sup>33)</sup>

周知の通り、次の聖書の言葉は、新島が最も感銘を受けた聖句である。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである<sup>34)</sup>

彼はこの聖句の意味を次のように説明する。

The verse, which I have chosen for the text seems so prominent and so striking on the pages of the New Testament as to arrest the attention of many, many readers of God's word. It does beautifully unfold the mystery of the Gospel truth and explains plainly why God did spare his bosom child to the world and on what condition this sinful race could obtain eternal life. This is indeed the essence of the Gospel story, and the key note to the mission of our Saviour on the earth.<sup>35)</sup>

私が説教のために選んだこの節は、新約聖書の中でも大変重要で心を打つ言葉であって、そのために神の言葉を読む非常に多くの人の関

心を引き付けてきました。この聖句は、福音の真実の神秘を美しく表し、なぜ神が彼の愛する独り子を世界に与えて下ったのか、罪深い人生行路が永遠の命を得るためにどんな条件が必要なのかを明白に説明している言葉なのです。これはまことに、福音の物語の本質と世界における救い主の使命に関する通知なのです。

新島はこの聖句に神の無尽の愛を知りつつも、かえって人間の邪悪で救いようの無い罪深さを感じる。

Although his love to the world may be infinitely great and infinitely intense, still it cannot be well appreciated by us unless we find out what the world does mean here, and know its helpless condition. The word "world" [世] in the text may mean here the lost world or mere lying in wickedness and sin.<sup>36)</sup>

しかし、そんな罪深い人間であっても、なおこれを救って下さる神であることを意識するとき、本当の神の愛の無限さを知ることができる、と新島は訴えるのである。

以上をまとめれば、新島において、神の愛とは、救い得ないほど罪深い人間をなおも救うために愛する独り子イエスを世に遣わされ、十字架にて死なせ賜うた神の無尽で完全な愛であって、神を愛することとは、罪深い自分をなお愛して下さる神、そして自分のために十字架に架かり、われわれの罪を購われたイエスに感謝し応答する愛である、と指摘することができるであろう。

### 「道理ト信仰ノ関係」 信仰と理性、キリスト教と自然科学

ところで、キリスト教を生来の宗教としない日本人は、過去から、キリスト教の教義を非常にさめた目で、現代人的に言えば合理主義の精神で批判してきた。

江戸中期に幕政を担った儒者の新井白石は、日本に潜入してきたシドチ神父の尋問を行った際にカトリックの教義を聞き、それが荒唐無稽であって「浅陋甚しく、(仏教と比べても)同日の論とはなすべからず」との批評を残している<sup>37)</sup>。

また、明治初年の岩倉使節団の公的な実況報告書である『米欧回覧実記』では、新旧約聖書を読んだ記録者(久米邦武)が次のような感想を綴っている。

(西洋人の) 尊重する所の新旧約書なるもの、我輩にて之を閲(よみ)すれば、一部荒唐の談なるのみ、天より声を発し、死囚復活(またい)く、以て瘋癲(ふうてん)の謔言(たわごと)となすも可なり、彼の異端を唱へて、磔刑に罹りし者を以て、天帝の真子となし、慟哭(どうこく)して拜跪(はいき)す、我其涙の何に由て生ずるやを怪む、欧米の各部、到る処に紅血淋漓トとして、死囚十字架より下るを図絵し、堂壁屋隅に掲ぐ、人をして墓地を過ぎ、刑場に宿するの思ひを為さしむ、是にて奇怪ならずんば、何を以て奇怪とせん<sup>38)</sup>

天から声が発したり、死んだ囚人がまた生き返るとは、でたらめで瘋癲のたわ言だ、とは痛烈である。

新井白石も久米邦武(のち早稲田大学教授)も、当時の日本を代表する知識人である。彼らのキリスト教批判は、キリスト教の神やイエスの復活の話などは、理性からいって到底受け入れられないという考えに基づくものであって、それはまた、キリスト教信仰を持たない現代の多くの日本人とも同様のものなのであろう。

新島は、幕末に軍艦教授所で数学や航海術を学び、アーモスト大学では地質学や化学、生理学、解剖学、天文学等も学び、日本人として最初に理学士という学位を得て欧米の大学を正規に卒業した「理系」の人物である<sup>39)</sup>。彼は、当時の日本人として最も進んだ自然科学を学んだ者ということができよう。

その彼が、神の啓示を受けてキリスト教に回心したとしても、いったい、どのようにして信仰と理性、あるいはキリスト教と自然科学との関係を整理したのであろうか。信仰の目を開くとき、理性の声を聞く耳を塞いでしまったのであろうか。

実は新島はこの問題も自分の関心事であって、彼の全集には「道理ト信仰ノ関係」に関する彼の説教が2編収録されている<sup>40)</sup>。

これらの文章によって、新島の思想を整理してゆきたいが、その前に、新島において、信仰とは何であるのか、確認をしておこう。

新島は信仰について、次のように語っている。

信仰の働きは、目以って見るにあらず、耳聞くにあらず  
望遠鏡の手立て克（よ）く数万里外の物を見る  
信仰の目は見え難きを見る<sup>41)</sup>

この世において目に見えざれども、有る者あり<sup>42)</sup>

信仰の働きとは、目や耳という人間の感覚器官で知覚するようなものではない。ちょうど望遠鏡を用いることで、数万里離れた物が良く見えるように「信仰ノ目ハ見へ難キヲ見ル」、信仰の目を用いれば、目に見ることが難しいものを見ることができ。そして、この世には、目に見えないけれども、存在している者があるのである。

新島の信仰に対するこの考えは新約聖書に基づくものであろうが<sup>43)</sup>、彼の理性と信仰の関係、自然科学とキリスト教との関係に関する思想を理解する上で重要なポイントである<sup>44)</sup>。

### 「開明ノ時代、道理起リ恐怖去リ、却テ信仰ノ生ズ」

そこで彼の「道理ト信仰ノ関係」の説教稿を検討しよう<sup>45)</sup>。

ここで彼のいう「道理」とは、語義としては、理のすじみち、物のそうあるべき理（ことわり）を表わすことから、現代的に言えば、「論理」もしくは「理性」と解釈することが適当であるが、新島は、ニュートンの万

有引力の法則や、ガリレオの振り子の法則も「道理」の例として挙げているので、「自然科学」という意味にも用いられている。そこで、ここでは、「道理」を文脈によって「道理」、「理性」、「自然科学」というような意味に捉えることがふさわしい。

まず新島は、野蛮な時代、人間は自然現象を奇怪な鬼や神の仕業と考えて恐怖を感じていたが、それは、「道理」が乏しいからであった。開明の時代になると「道理」が進んで恐怖が去り、その代わりに信仰がうまれた。文化が進むにつれて、人間には「道理」と信仰が二つながら進展していった、と語る。

野蕃〔蛮〕時代は、種々奇怪の談が多く、道理少なくして恐怖が多い、開明の時代は、道理が起り恐怖去り、かえって信仰が生じる<sup>46)</sup>。

世の文化進むに従い、益々人間が尊重すべきものは道理であって、人が未だ野蛮盲漠の時代にあっては何事を見ても道理に照らして是を了解することができず、少しく了解できないものは鬼の業、神の業だとして是を恐怖し、之を神として拝むに至る、中国、日本に於いても山の神、風の神、雷の神の類の考えがあったのは、やはりこの点から出てくるものと思われる。

そして、(中国、日本等アジアの国々は)何事に対しても不問にしてその事項を研究しない、これが、何時までも野蛮で、文明の地位にどんどん進む勢力を得ることができない理由である。

これに反して、ヨーロッパがどんどん進んで止まらず、今日の文明の域に上昇した道理は、何事にも尽く理性に照らしてその理の存する所を発見しなければ止まない精神に他ならず、そして、ついに今日のヨーロッパがあるのである<sup>47)</sup>。

新島は、その例として、ニュートンが、「何故ニ物ハ上ヨリ落ツルヤ、又何故ニ地ニ近ヨルニ順ヒ速力増加スルヤ」という疑問から、これを研究

して、ついに万有引力の法則を発見した例や、ガリレオが、「何故二一寺院ニ（天井に吊るされた）蠟燭掛カアチラコチラヘト動揺スル」のか疑問に思ったことで振り子の原理を発見し、「何故」という疑問から天文を研究してついに地動説を一変させて天動説を主張した例を挙げる。このように、なぜ？と疑問に思い、この事象が全く理論に適合しないのはなぜだろう？と考えて研究することで、ついに、常に事象を理論で説明できるようになるほどヨーロッパの自然科学が進展してきたことを説明する<sup>48)</sup>。

続けて彼は、信仰の話に移る。

信仰というものは、未だ見えないものを真理とするものである。故に信仰というものは、仮にも眼前に見て信じるのではない、将来のものか、または、未だ目に見えず、手に触れられないものでも、必ず有ると信じることである、人間社会に道理が欠くべからざるものであるごとく、信仰も欠くべからざるものである。社会が進めば進むほど、信仰は必要不可欠になるのである<sup>49)</sup>。

新島はその例として、親と子、夫と妻、主人と番頭、友人同士、書生と先生、病人と医者、人民と政府を挙げて、それぞれの関係は、互いに相手を信じる目に見えない「信仰」によって維持されることを指摘し<sup>50)</sup>、それによって、「道理」によって進展してきた人間社会はまた、信仰が無ければ一日でも維持できないことを説明する。さらに彼は、「道理」の進展は、人間を知識偏重で抜け目の無い者にさせやすいから、それを調和するためにも信仰が無ければならないことを主張する。

人間社会に道理が益進まば人知遂に shrewd [ずる賢い、抜け目の無い] に流れ易き憂あり、故に之を調和するに徳義上の信仰なかるべからず<sup>51)</sup>

道理は骨の如きもの、信仰は肉の如きもの、血の如きもの、命の如きものである。道理はゴツイ、信仰は柔らかかにてゴツイ所を調和する。

道理は死物、信仰は活物である<sup>52)</sup>。

「道理ト信仰ノ関係」の稿をここまで見ると、新島は文化や社会の進展には、「道理」と信仰の両方が不可欠としつつも、なお、信仰を「道理」の上位に位置づけていることが分かる。また、彼は本稿では、信仰を信頼、あるいは良心という意味で用いていることも知られる。彼は、「道理」は硬い骨のようなものであって、信仰は、それを動かす筋肉、血、命のようなものであると述べているからである。

しかし、信仰が理性の上位に位置づけられると、結局、理性はないがしろにされるのではないだろうか。また、新島は、宗教的な意味での信仰と理性との関係をどう考えているのであろうか。

### 「道理アル信仰ナカルベカラズ」

まず最初の疑問について、新島は、信仰が大事といっても、何でも信仰に結びつけることは「盲信仰」となる間違っただと考えだとして、医者例を挙げて信仰とともに知識と理性の両方が不可欠であることを論じている。

信仰が大事といって何でも信仰に結びつけるのでは、いわゆる盲信仰というものになる。「医者というものは信仰せねばならぬ」と言って、何でもかでも医者の言う所を信じ、「医者投じる薬を服せば宜しい」と言って医者を信じるのは大いなる迷いである。下等なる医者は安価な薬を高売りするかも知れず、誤診するかも知れず、誤った薬を投じるかも知れない。したがって、病人なるものは知識を要す、活目を要す、知識活目あって、その医者の信じるに足る理由を知らなければならぬ、平素の挙動、従来修行、その投薬の手際を知らなければならぬ。それによって類推して（我に投じる薬もまず間違いはあるまい）と信じるだけでなく、（この医者によれば、必ず治してくれる）と信じるのである<sup>53)</sup>。

信仰のみに進まば、また迷信に陥るの憂い無き能わず、よって、道

理ある信仰なかるべからず<sup>54)</sup>

「宗教上ニ於テ、道理ト信仰ノ関係ハ決シテ齟齬スベキモノニアラス」

さらに、新島は、宗教上においても、「道理」と信仰は互いに密着して分けることのできない双子のようなものである。「道理」と信仰は決して矛盾しない、と主張する。

宗教上において、やはり道理と信仰の関係は密着しているものであって、決して矛盾するものではない。宗教はとかく信仰を重んずるので、ややもすると信仰のみに流れ、世の中の道理を活用しない憂いがある。さればとって、道理のみに流れれば、道理で理解できやすい所、そこから道理では理解できない「行き止まり」まで行き、その先は暗黒となって見るができない。ゆえに、信仰も道理の助けを借らざるを得ず、また、道理は信仰の助けを仰がざるを得ない。道理と信仰とは、今日の社会にとり、また宗教上にとり、互いに分離すべからざる双子のごときものである<sup>55)</sup>。

新島は、宗教でも「道理」と信仰の両方が必要であり、両者は矛盾しないことを説明するのにあたって、まず、「道理」だけでは「暗黒世界に踏み込むの憂あり」<sup>56)</sup>、として、「道理」だけによって神を信じることができないとするハーバート・スペンサーを批判する。周知の通り、スペンサーは、ダーウィンの進化論に立脚して社会進化論を唱えたイギリスの思想家である<sup>57)</sup>。

英国の学者スペンセルの如きは、神は不可知、神は不可思議なり、人知の至るまで進み、その先は分からず、信ずるに足らずと言れたるが、氏の如きはあたかも軽気球に乗り空中に上昇し、往かれる迄行き、その先は往かれぬ、分からず、信ずるに足らずと言うが如し<sup>58)</sup>

「道理」では神を知ることができないから、神は信じることができない、

とするスペンサーは、空中に上昇している軽気球から物事を見ているようなものだ、しかし、軽気球はどんなに高く上がろうとしても一定以上は上がれないように、「道理」だけで留まれば限界があり、そこから先を眺めれば、暗黒の空虚しか見えないおそれがある。

これ、あたかも軽気球に乗り空中に上昇するようなもので、空気が水素ガスよりも重い間は上昇することができるが、それ以上は上昇することができない、だから「予はここまで」と言って止まるのだが、そこから上を眺めれば、茫々として終果てしなく、暗黒にして光明が無い空虚が広がるだけである<sup>59)</sup>

しかし、実は、「道理」によっても、幾分かは神を知ることができる、と新島は述べて、次のような証拠をあげる。

- 人間は誰が作ったのか、誰がこのような奇々妙々（不思議で並外れるほど優れた）な人間を作ったのだろう。ギリシャのソクラテスは、人間の構造の優れていることに感心し、これは、人間の智よりも勝った知者がいて、人間を作ったのだと（述べる）
- 宇宙の現象を考えれば、結果があれば、必ず原因がなければならない。
- 宇宙の間、森羅万象（宇宙の一切の事物）が無限に運動をして止まることがないことを見、また、天体が非常に広大であることを知ると、これを作りこれを保存する基となったものは、いったい、どんな力なのであろうか。
- 人間の根元（「帰着スル所」）は何なのであろう？その根元を知らなければ、人は自分の魂を重んじない。これが、今日の道徳や宗教が人心を改良することができない理由である。
- 宇宙を見て、その果てしないことを知り、星が無限の先まであることを見て、この宇宙を作ったものもまた無限であるはずだと推究することができる。
- 人間に道徳心があり、善を善とし、悪を悪とするところから推究し

て、このような人間を作ったものも、この道徳心があると論及すれば、造物者とは、必ず善を好み悪を憎み賜うと推究することができる。<sup>60)</sup>

アーモスト大学で天文学を学んだ新島は宇宙に対する造詣が深く<sup>61)</sup>、その知識を元に、彼は、特に宇宙と神との関係について論じている。下の文章などは、太陽系の中で太陽から遠い天王星や海王星、最も近い水星などの温度の例を上げて、人類の住む地球が宇宙のパラダイスであることを指摘しているが、科学雑誌『Newton』の記事のような現代的な論説である。

昔、神が我が先祖をパラダイスの園にお作りになったのだが、人間がこの地球（上）に作られたのは、やはり神がアダムを楽園に置き賜うたごとく、太陽系の体系の中最も優等の地位を占めたるこの地球を宇宙のパラダイスとして人間へ与え賜うたのであろう、と予は思うのである。神がこの人間を惑星中の「ユラノス」（ユラナス、天王星）、「ネプチュー」（ネプチューン、海王星）等に作り賜はば、恐らく寒冷に堪えられない。また、「メルキュリー」（マーキュリー、水星）に作り賜はば、おそらく甚だ熱いので人間の繁殖には不適當であるはずだ。ゆえに、甚だ寒くはなく、また甚だ熱くないこの地球を選んでこの人間を作り賜うたことは、深く神の思し召しのあることであらう<sup>62)</sup>。

ところで、神学について、特に啓示神学（Revealed theology）と、自然神学（Natural theology）との二つの神学についてみると、前者は聖書に基礎を置くものであるが、後者の自然神学には、2つの意味がある。

第1の意味は、現代で一般的に言われる定義であって、啓示ではなく「理性に基づく神学」だが、第2の意味は、「自然界の事実から推論されることを基礎にした神学」であり、自然科学の成果によってキリスト教の神を論証する神学である<sup>63)</sup>。

自然神学はもともと、この第2の意味の神学であって、ニュートンの時代、すなわち、科学革命の初期の17世紀に「自然法則によって天体の動きがき

ちんとしているところに神の偉大さを見る」<sup>64)</sup> ことから全盛になってきたものである。それが、19世紀のダーウィンの進化論の登場を経て、20世紀の神学思想ではほとんど省みられなくなり<sup>65)</sup>、自然神学の定義も第1の意味に置き換えられるようになった。ただし、進化論が登場した段階では、ダーウィンも『種の起源』を第2の意味の自然神学書として理解して欲しかったのであって<sup>66)</sup>、アメリカ、ニュー・イングランドでは論争の中、正統派の神学者がそれを受容しており、新島もまたその影響下にあった<sup>67)</sup>。

今日、欧米の神学界では、第2の意味に準じた自然神学が復興しており、さまざまな大学で「科学と宗教」の講座が数多く開設されている<sup>68)</sup>。

それは、決して、アメリカにおいて進化論に異議を唱え、自然科学と対立する「インテリジェント・デザイン（知的設計）」運動に限るものではない。「インテリジェント・デザイン」に対しては、「全米科学賞」を受賞した進化論の研究者でありキリスト者であるフランシスコ・J・アヤラが、同地においてこれを批判し、「進化のほうがキリスト教といっそうよく共存できる」主張している<sup>69)</sup>。

英国国教会の司祭かつイギリスの指導的な理論物理学者<sup>70)</sup> ポーキングホーンによれば、復興された新しい自然神学の特徴は、「あらゆる科学的説明の基底となるもの、つまり、すべての科学的説明が前提とし、基礎とする自然法則がそもそもなぜ存在するのか、それ自体説明できないことに注目して、その法則が明らかにする規則を超えたところに何かもっと理解すべきことがあるのではないか」<sup>71)</sup> ということを問うものである。科学の領域において科学に対抗するものではなく、あるいは、本質的に科学が答えるべき問いに「口をはさんで」答えようとするものではなく、「科学の自己限定的領域を超えたところで形而上学に向かい、科学と補完的役割を果たす」<sup>72)</sup> ものなのであって、自然界の事実から推論されることを基礎にした神学である。この第2の意味の自然神学が、「自然科学の成果によって神を論証する神学」であるとするならば、復興された自然神学は、「自然科学の領域を超えたところに神を探求し、自然科学と補完関係にある神学」という第3の定義を与えることも可能であろう。

新島は自然神学の第2の意味において進化論を受容し、また宇宙と神に

関する彼の議論はこの意味における自然神学と言えるだろうが、彼はそこに留まらない。

新島が、「道理」では神を知ることができないから、神は信じることができない、とするスペンサーに対して、彼の思索の姿勢を軽気球での上昇に喩えて、「空気ノ水素ヨリ重キ間ハ上昇スルヲ得ル、其ノ上ハ上昇スルヲ得ズ」、すなわち、科学の領域までは探求して、そこに留まってそれ以上の探求を止めれば「空虚ナリ又暗黒ニシテ光明ナシ」「暗黒ナリ」と批判するとき、新島は明らかに第3の今日的な意味の自然神学の必要性を指摘していると言える。彼は優れて現代的な自然神学を提唱していると言えるのではないだろうか。

## おわりに

徳富猪一郎は、同志社英学校時代、新島から洗礼を受けて毎夜必ず祈祷を行っていたが、その主要な祈りは、「いかにすれば神を信じ、神と近づくことができるか」というものであった<sup>73)</sup>。しかし結局、彼は、同志社を退学してすぐにキリスト教信仰を捨て、洗礼を新島に返上する。それは徳富が新島の元を離れたとき、自分はキリスト教を信じたのではなく、新島を信じていたことを悟ったからである<sup>74)</sup>。新島とは無関係に「基督が神であるとか、奇跡とか云ふ様なること」について考えれば考えるほど、徳富には疑いが生じ、一時は深刻なノイローゼに陥っていた<sup>75)</sup>。

徳富は新島の神学思想を総括して「先生の基督教は、日本といふものを離れたる、単なる基督教ではなく、先生は日本を救ふといふことは勿論、世の中を救ふには、先づ己れの心を救はれねばならぬといふことを考へて、信仰をもたれたのであって、かくして一度び信仰に入られた以上、一生を通じて其の信仰に生きぬかれたのであって、神学上の議論など先生にとっては、余りインテレストが無かったと思ふ。要するに、先生は此の道をもって愛する日本を救はなければならぬ、否、日本を救ふには此の道以外になしとさへ考へられたのである」と述べる<sup>76)</sup>。

一般に、新島は神学論争に興味がなく、その意味で神学者ではない、と

言われるが、そのような評価は、徳富の上記のようなコメントに起因しているように思われる。しかし、徳富のこの評価は、「(新島が) 一度び信仰に入られた以上、一生を通じて其の信仰に生きぬかれた」という文脈の中で理解すべきである。そこには、(まじめに考えれば、自分のようにキリスト教に対していろいろ疑いが出て当然なのに、新島先生はいったん信仰を持った以上、男児として一生保持した、だから、先生はキリスト教について突き詰めて考えていたわけではないのだろう) という徳富の予断が含まれたコメントとして捉えるべきなのである。徳富は新島の神学思想を完全に理解していたわけではなかった。

しかし、本論で整理したように、新島の神学思想は、優れて今日的なものである。徳富流に言えば、我々は、新島の神学思想を通して「神と近づることができる」のである。

なお、本稿では新島の神論を述べたが、新島は神以上にキリストについて語っている。彼のキリスト論については別稿に譲りたい。

## 注

- 1) 本井康博『元祖りべラリスト』221頁 思文閣出版 2008年。なお原文は、大塚節治「回顧と展望」『キリスト教研究』第二十巻第一号 京都同志社大学神学科内基督教研究会 1942年。
- 2) 竹中正夫「ニューイングランド・ピューリタニズムと新島襄」『新島研究』96号 30頁 同志社社史資料センター 2005年。
- 3) 魚木忠一『新島襄 人と思想』182頁 同志社大学出版部 昭和25年。
- 4) 『現代語で読む新島襄』(同編集委員会編) 53～54頁 丸善 2000年。
- 5) 前掲書 54頁。
- 6) 前掲書 55頁。
- 7) 前掲書 17頁。
- 8) W. E. ホーダーン著／布施濤雄『現代キリスト教神学入門』180 - 182頁 日本基督教団出版局 1969年。
- 9) 同志社編『新島襄の手紙』60頁 岩波文庫 2005年。

- 10) 前掲書 52 頁
- 11) 前掲『現代語で読む新島襄』107 頁。
- 12) 新島説教、1883 年 6 月（於同志社）、5 年生卒業時の新島の演説草稿。『新島襄全集』2（宗教編）128～130 頁、ただし現代語は拙訳、同朋舎出版 1983 年。
- 13) 新島説教、1886 年 10 月 26 日（於長浜教会）、新島説教草稿。前掲書 193 頁。
- 14) シーラー著・内村鑑三代表訳『真理と生命』16 頁 聖書研究社大正 4 年刊。本書は、小崎弘道が明治 14 年に訳した『宗教要論』（十字屋書舗刊）と同一書。小崎訳書では、「余は）宗教には二種而已と言ひたるが其の一は即ち人を以て靦め人間の工夫に依て神に事へんと求むるものにして其二は其原真神に在りて全く神の方法に依て人を尋て救はんとする者也、蓋し基督教は此一点に至て大に他教に異なり是れ其教義の啓示に於て聖經の他書に殊なる所以なり」（原文漢字カタカナ混じり文）と訳されて現代人にとっては非常に分かりにくいために、内村代表訳を掲げた。
- 15) 前傾『新島全集』2 466 頁（原文漢字カタカナ混じり文）。
- 16) ヨハネによる福音書 14 章 6 節
- 17) 前傾『新島全集』2 163～164 頁（現代語拙訳）
- 18) 1874 年 5 月にマサチューセッツ州レキシントンにおいて新島が初めて行った公開説教。『新島襄全集』7（英文資料編）121 頁 同朋舎出版 1996 年。
- 19) 前掲書同頁。
- 20) 前掲書 124 頁。
- 21) 新島説教、1887 年 1 月 21 日（於大阪土佐堀青年会館）、前掲『新島襄』2、246 頁。
- 22) 森孝一「『9・11』とアメリカの「見えざる国教」」『一神教学際研究』1 4 頁、同志社大学一神教学際研究センター 2005 年。
- 23) 前掲『新島全集』2 193 頁
- 24) アリスター・マクグラス著／芳賀力訳『神学のよろこび』52 頁 キリスト教新聞社 23 頁 2005 年
- 25) 新島の『全集』2 には、旧約聖書の重要な登場人物であるモーゼやヤコブ、カインとアベルについて論じた説教稿（録）が収録されている。
- 26) 「セム的一神教」の問題は、一神教間の対立を取りざす現代において特に重要であるが、この問題は、故竹中正夫先生の「ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教は、とかく対立の構造をもってとらえられているが、究極的には一つの神に帰するもの」

との指摘（前掲竹中論文 32頁）が有益な示唆を与えるであろう。一神教を総合的かつ学際的に研究し、三者間の仲介者を目指す世界で唯一研究機関・同志社大学一神教学際センターの益々の活躍が待望される。

- 27) 前掲『現代キリスト教神学入門』194～195頁。
- 28) 前掲『現代語で読む新島襄』197頁。
- 29) 前掲『新島襄全集』2,465頁（原文漢字カタカナ混じり文、一部カナを漢字に直した）。
- 30) 前掲書455頁、現代文拙訳
- 31) 前掲書455～456頁。
- 32) 前掲書465頁。
- 33) 前掲書461頁（原文漢字カタカナ混じり文）。
- 34) ヨハネによる福音書3:16
- 35) 新島の前掲レキシントン演説の冒頭の言葉。前掲『新島襄全集』7,119頁。
- 36) 前掲書同頁。
- 37) 徳富蘇峰『近世日本国民史』（普及版）第20巻466頁、明治書院、昭和11年。
- 38) 久米はしかし、西洋人から見れば、東洋の宗教も奇怪と考えるだろう、「故に宗教は、形状と論説とを以て辨訟し難し、所謂実行ノ如何を顧るのみ」と続けて語り、また、キリスト教によって西洋人が「修身の実を踏」み、「勉強競励の心を興して、相協和する」ことも指摘しており、キリスト教を糾弾しているわけではない。以上、『欧米回覧実記』第1巻343頁、岩波文庫、1997年（原文漢字カタカナ混じり文、一部カナを漢字に直した）。
- 39) 鳥尾永康「新島襄と自然科学」『新島襄の世界』晃洋書房 1990年、および北垣宗治『新島襄とアーモスト大学』山口書店 1993年
- 40) 1883年8月24日。前掲『新島襄全集』2には、新島の「道理ト信仰ノ関係」と題する説教稿がA、Bの2稿収録されている。同書注解では、Aが鉛筆書きでBが墨書であることから、前者が説教稿であって、Bが、実際に行った説教を清書したものであろう、と推定している（同書650頁）。そのせいでもあろう、Aの方が書き物として整っており、文章のボリュームもある。
- 41) 前掲書、37頁（原文漢字カタカナ混じり文）。
- 42) 前掲書、294頁（原文漢字カタカナ混じり文、一部カナを漢字に直した）。
- 43) 「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」（ヘブラ

イ人への手紙 11:1)、「私たちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」(コリントの信徒への手紙二 4:18)。

- 44) 新島の信仰に関するこれらの言葉は、本井康博氏が「見えないものを見た人たちー金子みすゞ、サン・テグジュベリ、そして新島襄ー」(『新島襄を語る (三)ー錨をあけてー』思文閣、2007年)にて指摘されておられる。
- 45) 説教稿 A と B は内容的には重複しているので、ここでは両方のポイントとなるところを参照してゆく(注記 36 参照)。
- 46) 前掲『新島襄全集』2、145 頁(現代文、拙訳)。
- 47) 前掲書、139 頁(現代文、拙訳)。
- 48) 前掲書、140 頁(現代文、拙訳)。
- 49) 前掲書、同頁(現代文、拙訳)。
- 50) 前掲書、141,146 頁。
- 51) 前掲書、146 頁(原文、漢字カナ混じり文)
- 52) 前掲書、140 頁(現代文、拙訳)。
- 53) 前掲書、141 頁(現代文、拙訳)。
- 54) 前掲書、146 頁(原文、漢字カタカナ混じり文、一部現代表記に直した)
- 55) 前掲書、147 頁(現代文、拙訳)。
- 56) 前掲書、142 頁(原文、漢字カナ混じり文)
- 57) 青年時代の新島の川田塾同門の尺新八は 1880 年(明治 13 年)、ハーバート・スペンサーの *Education: Intellectual, Moral, and Physical* (『教育論』) を『斯氏教育論』として翻訳出版したことを契機に当時、日本の教育界にスペンサーブームがわき起こっていた。ちなみに、尺は、同書の中で、Intellectual Education を「心智の教育」、Moral Education を「品行ノ教育」、Physical Education を「体軀ノ教育」と訳している。その 3 年後の 1886 年、東京師範学校の伊澤修二が日本人としてはじめて教員向けの教育学の教科書『教育学』(丸善商社書店刊)を著し、この 3 育を「知育・徳育・体育」と翻訳している(巻末に和英対訳一覧あり)。ただし、同書を読むと、特に「徳育」は情操教育や睡眠、友愛、愛国心の大切さを述べており、宗教教育を述べているものではない。
- 58) 前掲『新島襄全集』2、147 頁(原文、漢字カタカナ混じり文、一部現代表記に直した)

- 59) 前掲書、142 頁（現代文、拙訳）
- 60) 前掲書、142～143 頁（現代文、拙訳）
- 61) 新島遺品庫資料（目録番号 0924）に、" Joseph Nee-Shima, Yeddo Japan. Aug. 27<sup>th</sup> / (18) 68. Amherst " という新島のサイン入りの Denison Olmsted 著の天文学教科書 *AN INTRODUCTION TO ASTRONOMY: DESIGNED AS A TEXT-BOOK RUN THE USE OF STUDENTS IN COLLEGE* が収蔵されている。なお、本書は、同志社英学校の生徒に貸し出されたようで、下記のような活字印刷による貸し出し注意符が添付されている。貸し出し相手に敬語を用いる新島らしい文章である。

「 第 號

- 一、貸書期限ハ九十日間トス
- 一、読名ハ右ノ期限内ニ必ず御返却ヲ要ス
- 一、復貸ヲ謝絶ス
- 京都寺町通丸太町上ル松蔭町十三番戸

新島 襄」

- 62) 前掲『新島襄全集』2、243～244 頁
- 63) 松永俊男「ダーウィニズムと自然神学」『同志社大学 21 世紀 COE プログラム 一神教の学際的研究 文明の共存と安全保障の視点から 研究成果報告書 2006 年度』310 頁 同志社大学一神教学際研究センター 2007 年
- 64) 前掲松永論文、同頁。
- 65) J. ボーキングホーン著／本多峰子訳『自然神学とキリスト教』126 頁、教文館、2003 年。
- 66) 前掲松永論文 320 頁。
- 67) 前掲島尾論文 177,179 ページ
- 68) 前掲『自然神学とキリスト教』3 頁。
- 69) フランシスコ・J・アヤラ著／藤井清久訳『キリスト教は進化論と共存できるか ダーウィンと知的設計』6 頁、教文館、2008 年。
- 70) 前掲マクグラス『神学のよろこび』52 頁。
- 71) 前掲『自然神学とキリスト教』127 頁。
- 72) 前掲書 127～128 頁。
- 73) 徳富蘇峰『蘇峰自伝』111 頁、中央公論社 昭和 10 年。

- 74) 前掲書 698 頁。  
75) 前掲書同頁。  
76) 徳富猪一郎『新嶋襄先生』75 頁 学校法人同志社 昭和 30 年。

## 参考文献

- 本井康博『元祖リベラリスト』思文閣出版 2008 年  
大塚節治「回顧と展望」『キリスト教研究』第二十卷第一号 京都同志社大学神学科内基  
督教研究会 1942 年  
竹中正夫「ニューイングランド・ピューリタニズムと新島襄」『新島研究』同志社史資  
料センター 2005 年。  
魚木忠一『新島襄 人と思想』同志社大学出版部 昭和 25 年  
『現代語で読む新島襄』（同編集委員会編）丸善 2000 年  
W. E. ホーダーン著／布施壽雄『現代キリスト教神学入門』日本基督教団出版局 1969 年  
同志社編『新島襄の手紙』岩波文庫 2005 年  
『新島襄全集』2（宗教編）同朋舎出版 1983 年  
シーラー著・内村鑑三代表訳『真理と生命』聖書研究社 大正 4 年  
小崎弘道『宗教要論』十字屋書舗 明治 14 年  
新約聖書  
『新島襄全集』7（英文資料編）同朋舎出版 1996 年。  
徳富蘇峰『近世日本国民史』（普及版）第 20 卷 明治書院、昭和 11 年。  
『欧米回覧実記』第 1 卷、岩波文庫、1997 年  
島尾永康「新島襄と自然科学」『新島襄の世界』晃洋書房 1990 年、  
北垣宗治『新島襄とアーモスト大学』山口書店 1993 年  
本井康博『新島襄を語る（三）- 錨をあげて -』思文閣、2007 年  
黒岩比佐子「『食育』の先覚者・村井弦斎」（第 3 回、明治の教育の「三育」と食育）  
<http://www.mic.jp/fun/shokuiku/shokuiku003.html>（2008/9/28 調査）  
新島遺品庫資料 目録番号 0924 上 -07- Denison Olmsted 著 天文学教科書  
松永俊男「ダーウィニズムと自然神学」『同志社大学 21 世紀 COE プログラム 一神教の  
学際的研究 文明の共存と安全保障の視点から 研究成果報告書 2006 年度』同志社  
大学一神教学際研究センター 2007 年

- J. ボーキングホーン著／本多峰子訳『自然神学とキリスト教』教文館、2003年。  
フランシスコ・J・アヤラ著／藤井清久訳『キリスト教は進化論と共存できるか ダーウィ  
ンと知的設計』教文館、2008年  
アリストター・マクグラス著／芳賀力訳『神学のよろこび』キリスト教新聞社 2005年  
徳富蘇峰『蘇峰自伝』中央公論社 昭和10年  
徳富猪一郎『新嶋襄先生』学校法人同志社 昭和30年

(お詫びと訂正)

前号の拙論「ラーネッドとセイヤーカレッジ」の注45で、ハーディーが「募金がちょうど5千ドルになるように、不足額の5百ドルほど自らも募金を行っている」と記述したが、この部分を、彼（ハーディー）が「自らも500ドルを募金して、募金の額は5千ドル余りに上った」と訂正させていただきます。ご指摘いただきました本井先生、ありがとうございました。